

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：水沼英樹病院長補佐)

弘前大学医学部附属病院広報誌

〒036-8563 弘前市本町53
TEL: 0172-33-5111 (代表) FAX: 0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

なんとう

南塘だより

第46号

(創刊：1994年12月15日)

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言～大学病院の雰囲気が変わった～

弘前大学医学部
附属病院長 花田 勝美



4月に入り、大学病院の雰囲気が変わりました。にぎやかになったということ。中央診療棟を巡回する折、ヒトの往来が激しくすれ違うことが困難な時があります。医師や技師さんに混じってフレッシュな看護師さんが増えたことが実感されます。7：1看護体制の影響かも知れませんが、頼もしい力を感じます。スタッフが増えることはいろいろな意味でよいことです。まずは患者さんのサービスに繋がります。同じ附属病院のスタッフとして共通の理解をもち、喜びはもちろんのこと危機感もともに分かち合いたいと願っています。まずは、診療科を超えてスタッフ同士、元気な「おはよう」の掛け声を忘れずをお願いします。就任以来、今後の附属病院が目指す

目標として、「医療の安全」、「先進医療」、「健全経営」の3本柱を掲げました。医療の安全については念願がかない、医療安全推進室に専任の医師の配属が認められ、循環器外科の福井康三先生が、准教授として就任いたしました。早速、GRMとして医療安全推進マニュアルの作成やインシデント・アクシデントレポートのまとめ、禁煙対策などの課題に当たっております。特に、医師からのインシデントレポートは近隣の大学を抜く数となりました。人間の生命の複雑性と有限性に対しては、医療は常に不確実性を伴うものです。引き続き小さなリスクの報告にご協力ください。高度先進医療は「先進医療」に統一されましたが、附属病院独自の特徴ある申請の増があり、今後の発展が期待されます。手術数から見た全国病院ランキングでは随所に弘前大学が高く評価されてうれしい限りです。加えて、本年は地域がん診療連携拠点病院に認定されたことから、病院挙げてのバックアップ体制が必要です。困窮する国家財政に由来するすべての縮小計画は病院経営にも及んでいます。ともかく平成18年度は病院スタッフの懸命な努力により見事に持ちこた

えました。問題は、今後です。附属病院は将来を見据えた経営戦略を立て、ぜひ何でも実行するために外部から医療コンサルタントを導入することに致しました。現在のよう不確実な時代にあつて、今後の健全経営を継続できることを強く期待しています。各科・各部門には院内調査に全面的なご協力をお願い致します。新人の看護師さんとともに、今後は女医さんの比率が伸びます。しかしながら、女性スタッフに対する職場環境の改善が万全とはいえませんでした。まずは、24時間保育所を病院敷地内に準備することから始めます。保育所は遠藤学長のご理解のもと、20年4月に開業予定です(別項参照)。さて、本年9月には新外来棟が竣工致します。これに先駆け、附属病院では「7月1日」から病院職員の禁煙が行われます(全学敷地内禁煙は10月1日より)。国民のための「健康増進法」の制定に基づくものですが、平成5年には男子の肺がんの発症率が胃がんのそれを上回りなおも増加しています。愛煙家は、この機会に禁煙の意義に理解をいただき不退職の決意をお願いします。

先憂後楽

顕微鏡で病気を診る



病理部長 鬼島 宏

がん医療における病理(病理診断・病理検査)の役割について説明させていただきます。がんの確定診断は、がん細胞を顕微鏡下で直接検出することにあります。つまり腫瘍が発見された場合に、それが悪性(がん)であるか良性であるかの確定は、腫瘍の一部を採取して、顕微鏡レベルでがん細胞の有無を探索することにゆだねられています。がん細胞を検出し確定診断することで、一連のがん治療が動き出すといっても過言ではないため、時として臨床医はがん細胞の採取に相当の労力をかけなければなりません。

最近のがん医療における病理の役割は、がんの確定診断に留まりません。「がん」と表現される病気の中には、悪性度が低く生命予後の良いものから、急速に転移・再発するものまでたくさんの種類(組織型)があります。そのようながんの種類を鑑別するのも病理診断の大切な役割です。また、がん治療後も大切な役目があります。外科的に切除されたがんを含む臓器(胃、肺など)を病理学的に検索して、どこまで浸潤・転移している腫瘍が明らかにすることで、その後の治療率や再発の指標となります。また、化学療法(抗がん剤)や放射線療法が行われた後にも病理検査が行われます。臨床的な治療効果判定は、がんの大きさが縮小したかどうかで判定が行われますが、病理学的な判定は、がん細胞が実際にどれくらい死滅しているかを指標に行われます。これは、治療によって腫瘍の大きさが縮小しても、その腫瘍の中に生きているがん細胞が多く残っている場合は、早い時期に再発することが示唆されるため、顕微鏡で生き残っているがん細胞の多寡を検索することには大きな意味があるのです。

今回は、がんを例に取りお話ししましたが、このように様々な病気の診断・治療判定などに病理診断は活躍しています。客観性のある病理診断は「質の高い医療」に直接つながりますので、われわれ病理部スタッフ一同は、常に質の高い病理診断ができるよう切磋琢磨し、附属病院の医療に寄与してゆく所存です。

各診療科の紹介【手術部】

当手術部は、昭和44年、当時の中央診療棟の完成と共に「中央手術部」として発足しました。そして、現在の棟には平成12年に移転し、9室で、一年間に全身麻酔約3800例(全麻率、全国立大で2位)、局所麻酔(脊椎麻酔他)約1000例が行われています(1病床当りの手術件数全国立大で9位)。これらを、佐々木部長を中心として、副部長1名、事務員2名、看護師32名、看護助手2名、臨床工学技士2名、放射線技師1名そしてその他のスタッフ全員が支え、安全に管理しております。もちろん、関連各科の先生方、そして麻酔科の先生方のご協力がなければこれだけの数をこなすことはできません。この場をお借り致しまして、手術部を支えてくださっているすべての方々に厚く御礼申し上げます。さて、安全第一の手術部ではありますが、現在2名の臨床工学技士の方に臨床テクノロジーセンターからきていただいております。ご存知のように、人工呼吸器の管理など病院全体における彼らの仕事量がどんどん増えており

ます。また、手術室においても人工心肺の管理をはじめ、手術室で使用する機器の管理業務は減ることはなく、いままでも彼らにお願いしていた手術室における血液検査業務(ガス分析他)は、手術部の看護師にお願いしてこなしております。また、手術室でのX線撮影、透視は1名の放射線技師が月、水、金にきて行っておりますが、火、木や、遅い時間帯(15:00以降)は当該科の医師にお願いして何とか凌いでおります。どうかこの現状をご理解くださいますようお願い致します。ともあれ、手術を受ける患者さんの安全が一番です。これを全うするためには手術部スタッフ全員の心身にわたる健康が第一と考えます。それには、無理のないスケジュール調整をすることが大事です。このことは、出来るだけ迅速に緊急手術に対応するためでもあります。今後ともどうかご協力のほどお願い致します。(手術部副部長 橋本浩)



平成18年度ベスト研修医賞選考会開催

平成18年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成19年3月2日18時15分より医学部コミュニケーションセンターで開催された。本賞は平成16年度から必修となった新医師臨床研修制度の発足に合わせて創設された賞であり、今回が3回目である。当日は、あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた相楽繁樹先生(二年次)、中山義人先生(二年次)、西村雅之先生(一年次)(五十音順)の3名の研修医が、「ここがポイント! 研修医の心がけ」と題して、この1年間自分が研修生活で重視したポイントについて10分間ずつスピーチを行なった。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した53名の学生諸君(特にこの1年間臨床実習で研修医に間近に接してきた5年生が中心)による投票が行なわれ、中山義人先生が平成18年度ベスト研修医に選ばれた。引き続き医学部コミュニケーションセンター1階で表彰式が行われ、中山

先生にベスト研修医賞として賞状、純銀製メダル、記念品が、相楽、西村両先生には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が、花田病院長より贈られた。その他にも特別賞として、この1年間の研修医向けセミナーに毎回出席した米内山真之介先生に「セミナー皆勤賞」が、コメディカルスタッフから最も高い評価を受けた相楽繁樹先生に「優秀パートナー賞」が、研修医が提出すべき各種レポートを最も一生懸命に書いた西村雅之先生に「レポート大賞」が贈られた。さらに事務方からの表彰「菊田賞」が山縣健太郎先生に贈られた。つづいて懇親会に移ったが、5年生からも「ベスト指導医賞」、「ベスト6年生賞」等の発表があり、会場は大いに盛り上がった。本賞が創設されて3年目を迎え、単に研修医のモチベーション向上のために貢献しているだけでなく、研修生活・臨床実習を通じて、研修医-6年生-5年生間に学びあい、教えあう関係が定着しつつあることが窺われ、今後ますます

卒前卒後ならびに卒前「屋根瓦方式」教育の促進に役立つことが期待される。(卒後臨床研修センター長 加藤博之)



花田病院長よりベスト研修医賞を贈呈される中山義人先生。

ボランティア紹介 ～装い新たに～

病院ボランティアは今年度で12年目を迎え、本院の顔として定着してきたところ。そのボランティアのユニフォームといえる「エプロン」に、今年度「新顔」が誕生しました。新顔のエプロンは、これまで使用してきたマスタード色とは別に、爽やかなイメージのバスターグリーン色で、エプロン上部には本院の「シンボルマーク」と「附属病院ボランティア」の文字が入った好感度抜群の一着となりました。その出来映えはボランティア活動者はもちろんのこと、患者さんからも大変好評を博しております。なお、当分の間は新旧2つのエプロンを併用して使っていく予定です。

今回の新しいエプロンは、ボランティア活動者にとって大きな励みとなり、さらなる活躍が期待されます。装い新たに変わった病院ボランティアを、今後ともよろしくお願いいたします。最後に、エプロンの新調に際しご尽力いただきました病院長はじめ関係者各位に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。(医事課)



保育所オープン決定!

今日の急速な少子化を踏まえ、次世代育成支援のための様々な施策が行われていますが、本学においても「子育てと仕事」の両立支援策のひとつとして、保育所を設置することになりました。開設予定は平成20年4月、設置場所は本院一般管理棟(旧看護学校)1階です。15台程度の駐車スペースも確保され、民間委託によって運営されます。

保育対象者は、「本学職員が養育する産後休暇明けから小学校就学の始期に達するまでの乳幼児」となっており、受入定員は、基本保育(保育時間は7時30分から18時30分)が30人、一時保育10人で、ほかに終夜保育も行う24時間型保育所です。保育料は現在未定ですが、弘前近郊の保育所とのバランスを取って設定される予定です。(総務課)

敷地内全面禁煙の開始

附属病院敷地内が10月1日から全面禁煙となります。弘前大学が役員会及び教育研究評議会にて10月1日から敷地内全面禁煙とすることに決定したことに伴うもので、本院も禁煙推進に向け積極的に取り組むことになりました。病院教職員については他に先がけ7月1日から実施し、職員用灰皿が撤去されます。喫煙は、がん・心臓病・肺気腫等の疾病の原因となるなど健康に悪影響を与えることが指摘されており、また受動喫煙についても健康被害が報告されております。平成15年5月に健康増進法が制定され、本院でも喫煙場所を指定するなど受動喫煙防止策に対応し

てきました。しかし最近では住民の健康を守り病気を治療する場である医療機関は、完全分煙では不十分であるとされ、全面禁煙に踏み切る施設が増えてきております。なお、本院では喫煙者に対する、禁煙相談、禁煙外来について現在検討中です。(総務課)



栄養サポートチーム(NST)発足のお知らせ

近年、全国の病院において、入院患者さんの栄養状態が良好でないという問題が重要視されるようになってきました。主な原因の一つとして、主疾患の治療が優先され適切な栄養管理が後回しになっていたことがあげられています。

NSTは全ての患者さんが適切な栄養管理を受けられる事を目標として活動していきたくと考えております。入院患者さんの栄養管理に難渋していたり、栄養投与に関する事で疑問などがありましたら、積極的に栄養管理部までお問い合わせ下さい。NSTで対応致します。スタッフ一同心よりお待ちしております。(栄養サポートチーム チーム長 小川 吉司)

栄養管理を的確に、かつ積極的に行うことで合併症や感染症などが減少し、治療効果が高くなる事が認識されてきています。また、そのことで在院日数の短縮や薬剤の使用も減少し、病院経営の改善と医療費の削減にもつながると思われま



これらのことを踏まえ、本院では昨年11月、12月、今年の1月に全職員を対象としたNST勉強会を開催し、4月に栄養サポートチーム(NST)を発足しました。スタッフは医師6名、看護師2名、薬剤師1名、臨床検査技師1名、事務部職員2名、栄養士4名で成り立っています。

緩和ケアチームについて

従来、麻酔科外来ではがん疼痛治療に力を入れて参りましたが、平成19年4月に緩和ケアチームを立ち上げることとなりました。チームメンバーとして、身体症状の緩和を担当する麻酔科ペインクリニック医師3名に、新たに精神・心理面の症状緩和を担当する神経科精神科医師1名と、麻酔科外来専任看護師1名が加わりました。従来同様に麻酔科医師が毎日診療にあたり、毎週木曜日の午前中にチームとしての合同回診を行っており、リンパドレナージュを行う看護師が随時診療に参加しております。

活動目標は、がんを抱えた患者様とその御家族のQOLを高めることです。この目標を達成するため、各診療科の主診医や病棟看護師、さらにはパラメディカル各職種の方々の御協力をいただきながら、地道な努力を重ねて参りたいと考えております。チーム医療は緩和ケアの核心であり、今後さらに薬剤部や理学療法、栄養管理といった部門の方々にもチームの輪を広げて参りたいと考えております。皆様の御理解と御援助を心よりお願い申し上げます。(麻酔科 佐藤哲嗣)



緩和ケアチームの診療対象となるのは、がんのために治療・療養を必要としている入院患者様で、病状や病期は問いません。平日は毎日新患の受付をしております。診療内容としては、痛みや呼吸困難感などの身体症状の緩和、せん妄やうつなどの精神症状に対する治療、リンパ浮腫の治療やリラクゼーションを目的としたマッサージ療法による介入などがあげられます。

公益信託あおもり高度先進医療基金(健吾ちゃん基金)助成金贈呈式

みちのく銀行が信託代理店となっている「公益信託あおもり高度先進医療基金」から1千万円の研究助成があり、3月6日に贈呈式が執り行われました。同基金は、本院初の生体肝移植の際に集まった募金の剰余金で、高度先進医療を受けなければ生命を維持できない患者や、社会生活を送る上で重大な障害がある患者に対する有効な医療の発展に役立てるため1995年に創設されたものです。この日は基金の運営委員長の今 充氏(弘大名誉教授)等が本院を訪れ、花田病院長に目録が手渡されました。病院長は同席した阿部由直教授(放射線科)と共に「基金の趣旨をくみ、有効に活用させていただきます。」と述べ、感謝状を授与しま

した。本院は地域がん診療連携拠点病院の指定を受けており、助成金はがんの治療や研究、公開講座を通じた市民への啓発活動などに活用されます。(総務課)



看護の心をみんなのところに

看護週間が近くなると、患者さんにお渡しするカードのメッセージを考え、玄関ホールにはどんなお花が飾られるのだろうと私たちの期待も高まってきました。今年のカードのデザインは、「幸せの青い鳥」を中心に看護の心を表現したものでした。病棟では、入院患者様へ受け持ち看護師が心を込めて書いたメッセージカードを5月11日にお渡ししました。カードを受け取られた皆様は、感激し涙ぐまれたり、ベットサイドに飾ったりと大変喜んで下さいました。玄関ホールには、ベルベット・

プリンセス・ライラックブルーと呼ばれる3種類の青いカーネーションをアレンジしたリースが飾られました。母の日が近いこともあり、多くの方々足を止め写メールなどで記念撮影をしていました。皆様の笑顔から私たちも励まされ、メッセージカードやお花を通して看護の心もお届けできたのではと感じました。(2病棟3階 上原子瑞恵)



平成19年度科学研究費補助金 技術職員7名が獲得!

平成19年度科学研究費補助金等の交付内定があり、附属病院では基盤研究(C)8件、萌芽研究1件、若手研究(B)9件、奨励研究7件、厚生労働科学研究費補助金1件の計26件が採択され、交付予定総額は49,400千円でした。そのうち、奨励研究においては、本院の技術職員7名が採択され、各部署での多忙な業務をこなしながら研究に励んできた成果が認められる喜ばしい結果となりました。(管理課)

奨励研究採択状況

所属	氏名	研究科題名
薬 剤 部	岡村 祐嗣	MRSA治療薬適正使用における感染制御専門薬剤師の新たな役割
	佐藤 淳也	がん専門薬剤師における職能向上の探究～がん治療均てん化に貢献する専門薬剤師育成～
	下山 律子	レニン・アンジオテンシン系抑制薬投与ラットにおける脂肪蓄積抑制作用の検討
医療支援センター 検 査 部 門	小野 有希	糖尿病患者の末梢血CD14陽性単球の活性化は動脈硬化の指標と相関するか
	工藤 良子	糖尿病性腎症における末梢単球中マイクロRNAの発現とその病態的意義の解明
歯科口腔外科	佐々木 千香子	入院患者の口腔ケアにおける歯科衛生士-看護師間の協力体制確立に向けた研究
医療情報部	船水 亮平	癌を光らせる内視鏡(画像処理ハードウェア)の開発

フライトナースに2名が認定

青森県が全国に先駆けて取り組んでいる「フライトナース」事業で、本院から救急部の工藤ふみ子副看護師長と集中治療部の木村俊幸看護師の2人が、「青森県フライトナース」として認定されました。この事業は、医師不足や財政的な問題から全国的に導入が進まない「ドクターヘリ」に代わって県が整備を進めており、県の防災ヘリや県警のヘリ等にフライトナースとして認定された看

護師が同乗し、無線で医師の指示を受け、患者さんに処置を施しながら病院に搬送する仕組みです。県内の4病院から2人ずつ計8人の看護師が、日本航空医療学会の講習会などを受講し、去る3月16日に、県庁において認定証授与式が執り行われ、三村青森県知事から各フライトナースに認定証の授与及びユニフォームが貸与されました。(総務課)

【編集後記】

喧嘩を極めた弘前公園の桜も散り、新緑の季節を迎えました。南塘だより第46号をお届けします。新年度の病院の動きとして、医療体制から福利厚生まで多くの記事が掲載されております。原稿をお寄せ頂きました皆様ありがとうございます。さて、入院基本料7:1取得に向

けて大学全体で取り組み、4月110名の看護師が新たに採用となりました。7:1看護の目的は「手厚い看護と高度な看護技術の提供」です。このことを、私達が望んでいた、より良い看護サービスを提供するためのこの上ないチャンスと受け止め、その品質を維持・向上することで病院経営に貢献できることを願っています。(広報委員 F. Y)